

平成21年度 【 大学振興会研究奨励補助 】 研究成果報告書

学部名 現代マネジメント学部

フリガナ ヨシダ ヨシオ
氏名 吉田 良生

研究期間 平成21年度

研究課題名 人口減少社会におけるワーク・ライフ・バランスの普及に関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	吉田 良生	現代マネジメント学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

日本の人口は2030年頃には年間100万人単位で減少すると予測されている。人口が減少すれば、国内市場は縮小し、労働力も減少し、年金制度や健康保険制度も維持できなくなる。そうならないようにするためにしなければならないことは(1)少子化を止めること、(2)人口減少を前提とした社会システムを設計することの2つである。この研究は雇用面における経済政策を考えることであり、具体的にはワーク・ライフ・バランスの導入である。

2. 研究方法等 (300字以内で記述)

ワーク・ライフ・バランスは正しく理解されていないのが現状である。すなわち、企業の福利厚生ではなく生産性向上のための施策である。このことが理解されてはじめてワーク・ライフ・バランスの効果が発揮される。この研究では、中部地方の企業を15社ほど集めて2ヶ月に一度研究会を開催し、企業におけるワーク・ライフ・バランスの導入状況と導入の阻害要因について研究発表することによって、企業に固有の問題と企業間で共通する課題を探り出すことを行った。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

ワーク・ライフ・バランス（以下、WLBと呼ぶ）は単なる労働時間短縮政策ではなく働き方を多様にし、働く時間を柔軟にする政策である。そうすることによって働く人の選択肢を広げることで働く人の働く意欲を高めて生産性を引き上げようとするものである。

労働は人生で最も重要なことであるが、労働をめぐる様々な問題が生じる。この研究では3つの問題を考えている。①青年期に適職を見つけないが仕事の選択肢が少なく見つけれない。②青年期に結婚や子育てと仕事を両立させられなくて退職を余儀なくされる、あるいは家庭生活上でストレスを感じる。③老親の介護のために仕事が続けられない。などの問題である。こうした問題を抱える人の仕事と家庭生活の摩擦を働き方や働く場所を見直すことによって解決しようというのがワーク・ライフ・バランスである。

この研究で特に注目するのは正規社員として働きながら仕事と子育てを両立させるためのワーク・ライフ・バランスであるが、ここではその手段としてのワークシェアリングに注目する。すなわち、仕事をひとつの課単位で捉えることによってそこで働く人が仕事全体を共有することによって一人の人が急にいなくなっても仕事に支障がでないように仕事の流れを見直すことによって職場内で一人一人の仕事の仕方を柔軟にしようという政策である。いわば、職場内での多能工化を進めることによってワーク・ライフ・バランスを推進することはできないか。これを経済理論的に考察し、企業の事例を観察した。理論的成果は『社会とマネジメント』2009年10月、第7巻第1号（本報告書「5. 研究成果及び今後の展望」）を参照されたい。企業の事例研究については企業15社と共同で研究会を開催しており、その成果は平成22年5月ないし6月にシンポジウムを開催して発表する予定である。このシンポジウムでは企業の事例を紹介すると共にワークシェアリング導入の問題を提起し、課題を整理することになっている。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①WLB	②労働生産性	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

- ・ 吉田良生「ワーク・ライフ・バランスと労働生産性」『社会とマネジメント』2009年10月、第7巻第1号、37-54頁
- ・ 東海ワークシェアリング研究会「シンポジウム ワークシェアリングと企業経営（仮）」当会ワークシェアリング研究会主催、2010年5月あるいは6月に名古屋市内において愛知県内企業の人事担当者を集めて開催する予定。